閲覧資料

松 江 堀 川 の 治 水 計 画（案）

【概 要 版】

平 成 23 年 9月

島　　根　　県

松江市街地治水対策検討委員会

近年、松江堀川周辺は市街化の進行が著しく、浸水被害が頻発しているため、早期の治水対策が求められています。しかし、松江堀川沿川には、武家屋敷等の観光資源、官公庁、宿泊施設や繁華街、新旧住宅が立ち並んでいるうえ、松江堀川自体も堀川遊覧による観光資源となっています。

そのため松江堀川の治水対策には、環境、景観、観光やまちづくりへの配慮が必要であるとともに、市民との合意形成が不可欠です。

島根県では有識者、住民代表者、行政からなる『松江市街地治水対策検討委員会』を設立し、大橋川改修事業や内水処理施設（排水ポンプ）の整備とともに進めなければならない松江堀川の治水対策について検討しています。

第3回検討委員会（7/20開催）においては、松江堀川の治水に関する目標と「河川改修」「流域対策」「放水路」を組み合わせた治水計画（案）について検討を行いました。

今後の検討を進めるうえで、松江堀川の治水計画（案）について多くの皆様からご意見を募集します。

松江市街地治水対策計画策定フロー

H22.3～

松江市街地
治水対策検討委員会

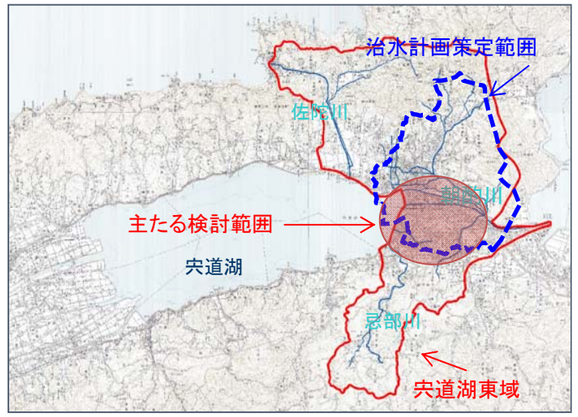
検討

松江市街地治水計画（提言書）
■治水計画
▼河道計画
▼内水処理計画
▼流域対策　　など

提言

H23.12

松江市街地治水計画策定（島根県）



治水に対する現状と課題

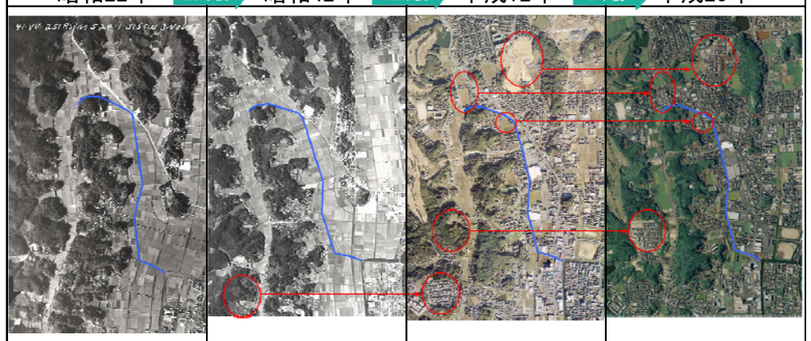
●高度経済成長期より松江堀川の埋立が進行し、川幅の減少や排水路の消滅がおこっています。また、宅地造成による山林、田畑の減少により、保水・遊水機能が低下しています。
●宍道湖の湖水を松江堀川の浄化用水として通年導水を行っているため、塩分濃度の変化に伴う多様な生物の生息環境に配慮が必要です。
●松江堀川周辺は優れた景観・名所旧跡が集中しており、観光の中心となっているため、景観・まちづくりへの配慮と十分な合意形成が必要となります。

浸水常襲地帯での土地利用の変遷

・高度経済成長期において、松江堀川の埋立が進行
　⇒川幅の減少、排水路の消滅
・同時期に住宅需要の増による宅地開発、街路整備等の都市化を推進
　⇒浸水リスクの増大に対応できないまま市街化が進行
・山地部や低平地の宅地造成による山林、田畑の減少
　⇒保水・貯水機能や遊水機能の低下

川へ流れ込む水の量が増え、河道への負担が増大

昭和22年 → 20年後 → 昭和42年 → 33年後 → 平成12年 → 8年後 → 平成20年



沿川は農地主体であり、山際の高いところに家屋が点在しています。 当時は、河川からの氾濫水は農地に貯留され、家屋浸水被害の危険性は低かったと推定されます。	昭和22年と比較して、若干家屋が増えてきているものの、大きな開発はなく、顕著な市街化は見受けられません。 よって、家屋浸水被害の危険性は低かったと推定されます。	昭和42年と比較して、特に中流から下流にかけて市街化が進行し、保水・遊水機能が著しく低下しています。 また、中下流域の沿川の農地は、ほとんど宅地化されています。上流についても、一部宅地開発が進行しています。	平成12年と比較して、特に中流から上流にかけて市街化が進行しています。 開発が中下流から中上流へ移行しており、さらなる保水・遊水機能の低下が懸念されます。

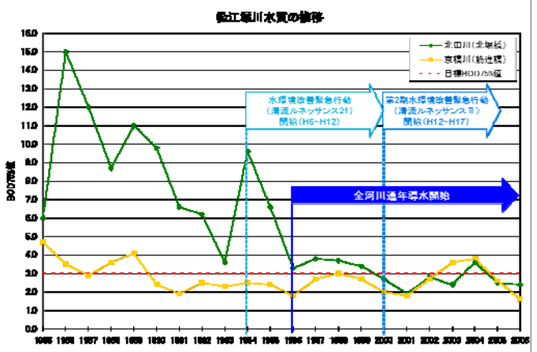
自然環境

・宍道湖の湖水を松江堀川の浄化用水として、通年導水を行い、水質を改善
　⇒塩分濃度の変化に伴う多様な生物の生息環境に配慮が必要

■第1期浄化用水導入事業
（S47～51）
宍道湖畔に末次ポンプ場を建設し、松江堀川に3.6m3/sを導水。
しかし、北田川などの排水はかんがい用水に利用されているため、塩分を含んだ宍道湖の水は塩害防止用の仮締切堤で循環しないようにされていました。

■第2期浄化用水導入事業
（H5～）
農業用水を常時確保するための堰を新設するとともに仮締切堰を撤去し、浄化用水の通年導水化を図りました。

■清流ルネッサンス取組結果
各種取り組みの結果，松江堀川の水質はほぼ改善されてきており、平成17年度には概ね目標水質を達成しました。



景観・観光・文化

・松江堀川周辺は優れた景観、名所旧跡が集中しており、観光の中心となっています
　⇒松江堀川の整備には、景観、まちづくりへの配慮と十分な合意形成が必要

堀川遊覧船（北田川）

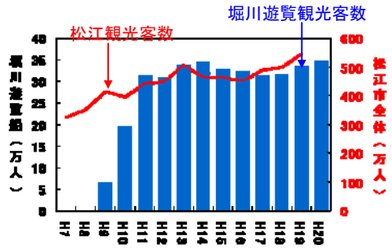
京橋川

塩見縄手

カラコロ工房とレイクライン

堀川遊覧船（城山西堀川）

松江城



松江市全体の観光客は年々増加しており、500万人を超えています。
また、平成9年には堀川遊覧船が就航し、年間約30万人の観光客でにぎわっています。

主な洪水と治水計画

●松江市街地では今までに多くの浸水被害が発生し、昭和47年7月災害では、松江市街地が一週間にわたり浸水しました。近年では平成18年7月災害で、再び松江市街地が浸水しています。
●平成18年7月災害を契機に**内水氾濫対策**として、平成18年11月に京橋川水門の設置や逆流防止施設の設置等対応策を記載した「松江市街地浸水にかかる当面の対応策」を公表し、平成21年までに全ての対応策が完成しました。
●平成20年8月には、「松江市街地内水対策検討会」を設立し、平成22年1月に排水ポンプの追加等の対策内容を記載した「松江市街地内水対策（案）」を公表しました。
●国においては、**大橋川の外水氾濫対策**として、平成22年9月30日に、「斐伊川水系河川整備計画【国直轄区間】」が策定され、大橋川改修事業が実施されています。
●大橋川改修事業や内水処理施設（排水ポンプ）の整備とともに進めなければならない**自己流氾濫対策**として、今回、「松江市街地治水対策検討委員会」において松江堀川の治水計画（案）について検討しています。

主な洪水と治水計画

年月日	記事
昭和39年7月	豪雨災害発生
昭和43年度	天神川小規模河川改修事業着手
昭和44年度	朝酌川中小河川改修事業に着手
昭和47年7月	豪雨災害（松江市街地のほぼ全域が水没）
昭和54年度	四十間堀川小規模河川改修事業に着手
昭和62年度	中川小規模河川改修事業に着手
昭和63年度	ふるさとの川モデル河川指定（松江堀川）
平成2年7月	ふるさとの川整備事業（北田川）に着手
平成6年3月	朝酌川全体計画　変更認可
平成9年7月	堀川遊覧船　運行開始
平成9年7月	豪雨災害発生
平成14年12月	中海・宍道湖淡水化事業の中止決定
平成16年12月	「大橋川改修の具体的内容」公表（国土交通省）
平成18年7月	豪雨災害（松江市街地約200ha、家屋1,200戸浸水）
平成18年11月	「松江市街地浸水にかかる当面の対応策」公表
平成21年3月	「斐伊川水系河川整備基本方針」変更（国土交通省）
平成21年12月19日	大橋川改修事業着手について鳥取・島根両県合意
平成22年1月18日	「松江市街地内水対策（案）」公表
平成22年8月27日	「斐伊川水系宍道湖東域河川整備計画」策定（島根県）
平成22年9月30日	「斐伊川水系河川整備計画【国直轄区間】」策定（国土交通省）

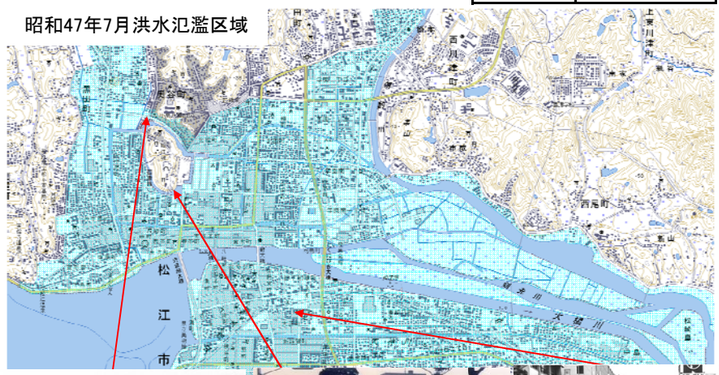
主な洪水

昭和47年洪水

主たる氾濫形態：外水氾濫

浸水被害状況	
床上浸水	約6,000棟
床下浸水	約14,500棟

昭和47年7月洪水氾濫区域



黒田町

殿町（県立博物館前）

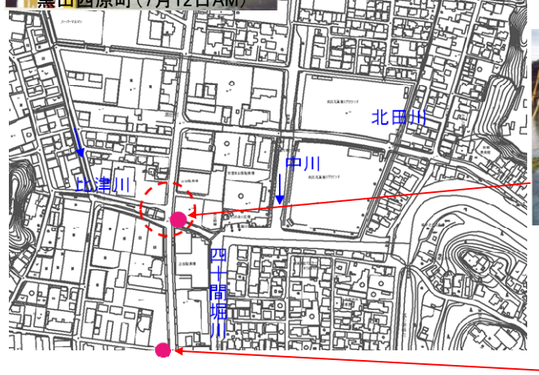
東朝日町

平成9年洪水

主たる氾濫形態：自己流氾濫

浸水被害状況	
床上浸水	1棟
床下浸水	33棟

黒田西原町（7月12日AM）



北田川（7月12日AM）

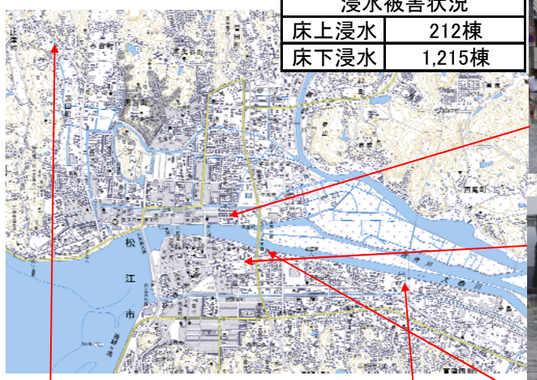
比津川・船津橋西付近（7月12日AM）

黒田町（7月12日AM）

平成18年洪水

主たる氾濫形態：外水氾濫

浸水被害状況	
床上浸水	212棟
床下浸水	1,215棟



東本町（7月19日PM）

松江駅前（7月19日PM）

比津川左岸（7月16日）

権太夫川（7月19日AM）

松江郵便局北（7月19日PM）

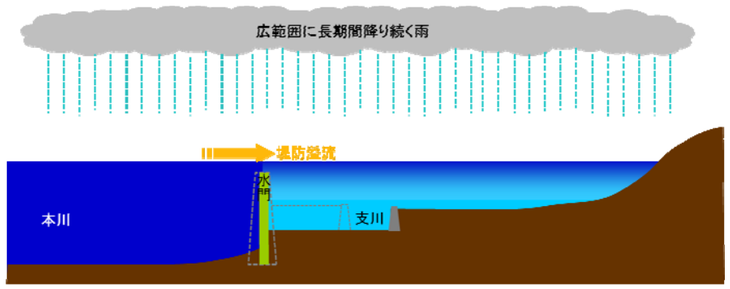
松江堀川の氾濫特性

松江堀川の氾濫形態には、「外水氾濫」、「内水氾濫」、「自己流氾濫」があります。
意見募集をする治水計画案は、「自己流氾濫対策」を対象とした計画となります。

■外水氾濫

宍道湖や大橋川の水位が堤防を上回り、市街地が氾濫します。

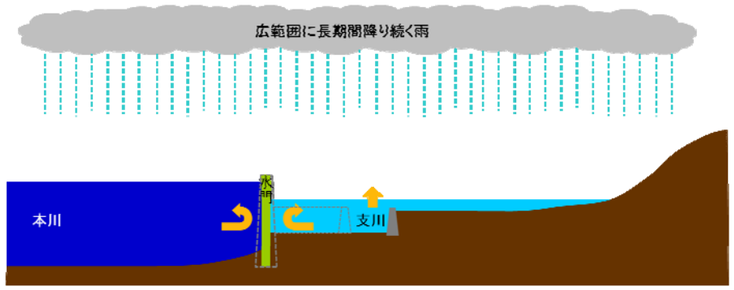
外水氾濫対策　→　大橋川改修（堤防、水門の整備）



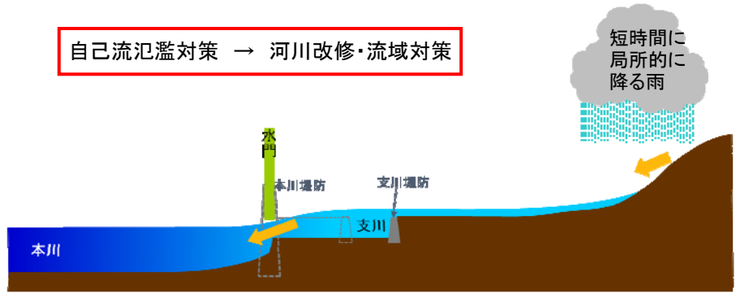
■内水氾濫

大橋川の水位が高く、松江堀川からの自然排水が困難となり、松江堀川流域で氾濫が発生します。

内水氾濫対策　→　内水処理施設（ポンプ）の整備



■自己流氾濫

流域に降った雨は、大橋川の水位が低い状態では、松江堀川を流れ大橋川へ流出します。しかし大雨が降り、流出量が松江堀川の排水能力を上回ると、松江堀川流域で氾濫します。

自己流氾濫対策　→　河川改修・流域対策